

## 故青木國夫著作物及び収集文献コレクションについて

### Report on Literary Works of the Late Kunio AOKI and his Collection of Literature

\* 植野 英夫

Hideo UENO



図1 故青木國夫  
(平成7年頃撮影)

**概要：** 現代産業科学館の初代館長を勤めた故青木國夫が著した研究報文・書評・時評・随想等の著作物のほか、博物館並びに研究活動を通じて収集してきた各種和洋文献・雑誌等を含むコレクションについて紹介する。故青木國夫は、昭和29年から62年まで国立科学博物館に勤務し、様々な研究・資料収集・展覧会の諸事業に携わるとともに、日本科学史学会・産業考古学会・等の諸学会に参加し、科学館発展並びに科学史研究に尽力してきた。報告では、日本の科学思想の普及と科学館発展に多大な功績のあった青木の履歴と、生涯の中で折りに触れて書きとめた研究や仕事への熱意の一端を、著作物及び収集文献の目録と共に掲載することを目的とする。もって、少なからず希少な文献を含むコレクションを有意義に活用するための一助としたい。

**Abstract :** In this report are introduced literary works of the late Kunio AOKI, the first director of Chiba Museum of Science and Industry, including research reports, book reviews, commentaries, and essays, as well as his collection of a variety of Japanese and western literature gathered through his museum-related and research activities. Aoki worked at the National Science Museum from 1954 to 1987 and engaged himself in various researches, collection of materials and exhibitions. At the same time as a member of various academic societies such as the History of Science Society of Japan and Industrial Archaeology Society he exerted himself in development of museums and studies of science history. This report aims to introduce the career of Aoki who made great contributions in spreading scientific thought in Japan and in development of science museums. It also aims to disclose his zeal for research and work as shown in his writings made from time to time together with an inventory of his literary works and collection of literature, thereby helping meaningful utilization of the collection which includes rare works.

**キーワード：** 青木國夫，コレクション，科学館，科学技術史

**Key words :** Kunio AOKI, collection, science museum, science technology history

## 1 はじめに

「私の願い」

私は今年の 3 月で大学の勤めを終わる。昭和 20 年太平洋戦争の終戦とともに社会人になったが、それまでは、天皇陛下のためにと、国のために死ぬことが日本人として最高の生き方と教えられてきた。それらの目的が崩れ去った後、自分なりに、自分や家族のために努力して生活を築いてきた。恐らく私と同じ年輩の人たちは皆同じ思いであろう。

終戦の翌年昭和 21 年旧制中学の理数科の教員になった。戦後の混乱期に定職につけたのは友人の斡旋があったからとは言え幸運であった。1 年半後文部省科学教育局に移った、戦後の混乱が未だ続いていたので私のようなものが採用されたのであろう。文部省では、科学教育係として学校の理科実験用具の調査、教材費に関する法律、教員の再教育などの仕事をした。

昭和 29 年上野の国立科学博物館に理工学館が新設され、そちらに転出する事となった。この係の専任は課長と私だけ、あと 2 人の学生アルバイトで 3 階建ての展示館の準備、メンテナンスその他すべてを行うのである。展示は当時テレビ、レーダーなど電子工学の発展が目覚しかったので、電気の原理から応用に関係する実験装置などを展示した。当時は現在と違い一般の博物館に対する理解が十分でなかったので、博物館につとめるのは年寄りの仕事のように思われていた。

ここで、博物館資料の収集のために日本や世界の科学史、技術史を勉強するとともに、科学博物館の運営を研究した。博物館には昭和 62 年まで勤務した。

(中略)

いよいよ本年 3 月で勤務を終わる。今になると、朝早く起きて勤めにでないですむことが嬉しいという気持ち、とともに、毎日の有り余る時間をどのように過ごしたらよいだろうと言う不安感に心が揺れる。自分では、これまでにぼんやりと、例えば時間がいくらでもあるのだから英語会話をやろう、外国旅行にやくだつから。これまでいけなかった先輩を訪ねたり、国内や外国を旅行したりしよう。これまでいろいろとところへ書き散らしたままになっている原稿の目録を作り、出来れば何冊かにまとめて出版したいなどと考えたりしていた。しかし、どうもあまり生産的でないように思えてきている。

(後略)

(V-29)

これは、平成 13 年 11 月 7 日に不帰の人となった青木國夫が遺した小稿の一節である。戦前に教育を受け、戦後は国立科学博物館とともに歩み、科学館活動・科学技術史研究等の諸分野に亘って活躍したのが青木國夫である。文の後半に記すように、青木は自分が生前に書き記した原稿や成し遂げた仕事の成果を将来へ伝えたい意志を持っていた。しかし病によってその志は成就することはなかった。

歿後、青木が遺した原稿や著作物、並びに収集した文献類は、御遺族から千葉県立現代産業科学館に寄贈いただいた。この寄贈には青木自身の意向もあったと聞く。

筆者は青木歿後 2 年半に現代産業科学館に着任した。そのため、残念ながら生前の青木の警咳に接した経験はない。着任後、青木コレクションのうち既に整理が終了していた一般図書に類するもの以外の整理に当たった。「私の願い」は、その作業中に見出した。その時点で筆者は、青木が、少年に優しく語りかける発見・発明のお話しや、誰でもできる実験の方法を、毎月のように雑誌に書き、また一方で最先端の技術や新製品についても言及していることを知っていた。

公職を退き、はたして自分はどこに視座を据えて後進へ語るべきか。「私の願い」後半の文章は、自身の著作をまとめるという過去へ向き合う事と、一方で進歩し続ける技術を理解・紹介しようという新たな領域へ漕ぎ出したいとする気持ちとの葛藤ではなかったか。筆者は、このように青木の意思を感じたのである。この報告を成すことを思い立ったのは、博物館人が長年に亘って書くこと、書き続けることの大事さを広く紹介すべきと感じたからである。サイエンスコミュニケーション、サイエンスリテラシー、科学力、今日、科学を学ぶ・理解する・伝える力が大切だといわれる。青木が体現してきたのは正にこのことに他ならないのである。

この報告では、青木が遺した著作及び収集文献コレクションを目録として公開することを目的とする。叙述にあたっては、青木が記した短文を併せて紹介することとした(用字は原文のまま)。コレクションには、青木自身が整理し体系化した跡がみえ、言葉としては正確ではないかもしれないが“自分史”をまとめようという意志があったことが窺える。青木の書いた短文や著作物と収集文献の体系化の足跡をみることで、故人の志に触れていきたいと思う。

## 2 青木國夫の生涯

青木は、大正 13 年 4 月に東京都中野区に生まれた。昭和 17 年 3 月東京府立実科工業学校機械工作科、20 年 9 月に東京物理学校理科学部を卒業した。

昭和 21 年 1 月に日本大学第三中学校の教諭となるも、22 年 7 月に文部省科学教育局科学教育課に勤務を命ぜられ、24 年 6 月に文部省初等中等教育局に移った。文部省に移った頃の青木は、携わっている仕事が自分に相応しいものであったか思い悩んでいた。

ノートの日記から（昭和二十五年五月二十五日（木））  
（前略）

自分は現在いかにすればよいのか。又昏迷のなかに踏出しつつある。今度は長いのだろうか。又うやむやにしてしまうのであろうか。唯今度こそは楽なものに逃避することは許されない妻子のある身だから。現在の状態になることが予測されていたのであるが、此れ程早く来るとは考えてもいなかった。先は明る開けているのであろうか。行づまりなのであろうか。

自分の生活に自尊心を失ったものはあわれである、だんだんちぢこまって来るだけである。

人間の半ばに来て再び迷に当面して自分の道は果してどこなのであろうか。（F-38）

29 年 2 月 1 日付けで国立科学博物館へ出向し、工学課に配属された。以降、定年を迎えるまで国立科学博物館に勤務することとなる。

博物館へ移ってからは、業務の多さにも関わらず、新しいこと、独自のことをやり遂げたいという意欲を持つようになった。

1 Oct. 1954

（前略）

従来の博物館の行き方をこの際我々で再検討する必要がある。その第 1 段階として世界中より集まってくる pamphlet を研究して我々の guide としたい。小数の groupe で始め、だんだん広げて行けば良いのではないか。（中略）自然科学と博物館の性格について再検討すべきである。

（F-38）

昭和 39 年 1 月に国立科学博物館第二研究部工学課長に就任し、41 年 4 月に理工学研究部工学研究室長、48 年 4 月に理工学研究部工学第一研究室長、50 年 4 月理工学研究部長となった。科学博物館理工学部を一筋に勤め、62 年 3 月に国立科学博物館を退職した。同年 11 月には名誉館員の称号を受けている。

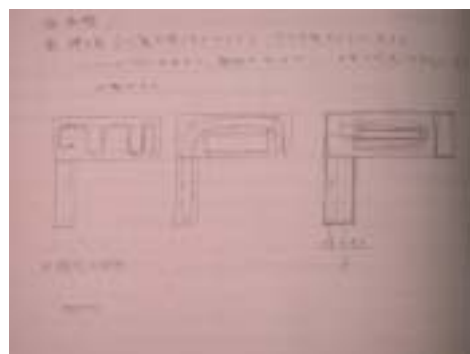


図 2 展示室の動線を検討するメモ  
昭和 42 年「展示研究会」(F-100)より

科学博物館において主に携わった展覧会は次のとおりである。

昭和 29 年「電気と通信」、35 年「時と時計」、36 年「録音の話」、36 年「日本のロケット観測」、39 年「理科機器から見た理科教育」、40 年「日本の科学を築いた人たち」、42 年「動くおもちゃの科学」、45 年「ゲーテンベルクと印刷」、54 年「科学者レオナルド・ダ・ビンチ展」等研究テーマであった日本魔鏡に関しては、実物も収集してきた。それらは平成 6 年に国立科学博物館に寄贈している。

国立科学博物館在職中にあつては、昭和 32～37 年度文部省理科器械修理技術講習会、46～57 年度文部省社会教育研修所学芸員講習会の講師を務めた。37 年東京電機大学電気学校、49～50 年山口大学教養学部、50～55 年工学院大学、56～59 年東京都立大学等の講師を務め、62 年から亡くなるまで東京国際大学教養学部教授であった。

学会活動では、昭和 40 年日本科学史学会総務委員、46～57 年日本学術会議・科学史科学基礎論研究連絡委員会委員、48 年第 14 回国際科学史会議組織委員、52 年から産業考古学会幹事、54 年から太平洋学会理事、55 年から国際博物館会議国内委員会監事、56～59 年日本計量協会歴史資料調査委員会委員長、58 年から水中考古学会などで委員を務めている。

科学館・博物館の新設にあたっては、昭和 37 年日本科学技術振興財団科学技術館基本計画の作成に携わり、41 年船舶振興会船の科学館基本計画、56 年新潟県立自然科学館基本計画の作成と監修、

56～58年国立こどもの城コンピュータ,科学プレー委員,62年栃木県立子ども総合科学館開設準備委員,平成6年多摩六都科学館開設準備委員等を歴任した。各科学館へのコメンテーターとしての活動については,当館をはじめとして枚挙に暇がない。

こうした日本の科学館発展に尽力した功績が認められ,昭和56年11月,博物館活動における功績に対し文部大臣から表彰を受けている。

### 3 主な著作

青木は,単行本の刊行の他,専門雑誌への論考・報文,一般雑誌への実験紹介や科学エッセイまたは事典類の科学史に関する解説,古典の復刻監修など多彩な著作物を遺した。これら全てのものがこのコレクションに遺されているわけではないが,主なものを列記しよう。

#### 【単 著】

- 『科学博物館ガイドブック 電気と通信』国立科学博物館,1954年
- 『理科教育講座第3巻 第2部 理科の施設と教具 理科施設・教具のあり方』誠文堂新光社,1954年
- 『保育社の小学生全集96 博物館のはなし』保育社,1957年
- 『学級図書館5年18 どうぐときかい』青葉書房,1958年
- 『科学博物館ガイドブック 音とレコーディング』国立科学博物館,1961年
- 『小学館の学習図鑑シリーズ24 機械の図鑑』小学館,1962年
- 『科学博物館ガイドブック 理科学機器から見た理科教育』国立科学博物館,1964年
- 『科学博物館ガイドブック 日本の科学と技術』国立科学博物館,1966年
- 『科学の歴史』世界文化社,1968年
- 『ニュートン』ポプラ社,1968年
- 『機械と道具』国際情報社,1972年
- 『永久機関』光村教育図書,1979年
- 『日本の科学を築いた人たち』国立科学博物館,1979年
- 『日本の博物館8 科学の歩み』講談社,1981年
- 『やさしい道具の科学』民衆社,1986年
- 『博物館基本文献集第18巻 博物館のはなし』大空社,1991年

#### 【共 著】

- 『思い違いの科学史』朝日新聞社,1978年
- 『装置実験室』日本ブリタニカ,1980年
- 『人形カラクリ』日本ブリタニカ,1980年
- 『博物館講座(2)理工系博物館の歴史』雄山閣,1980年
- 『思い違いの科学史』朝日文庫,2002年

『遊びの百科全書図説からくり』河出書房新社,2002年

#### 【共訳書】

- 『少年少女科学名著全集5 オランダ起原エレクトリカル実験録』国土社,1965年
- 『インターナショナルライブラリー6 通商の道』(ジャン・デュッシェ著)フレーベル館,1971年
- 『ヨーロッパ産業遺跡・博物館ガイド』日本放送出版協会,1975年
- 『つくりながら学ぶやさしい工学4 風車』(アン&スコット・マクレガー著)草思社,1985年
- 『フランス百科全書絵引』(ジャック・ブルースト監修・解説)平凡社,1985年

#### 【報告書】

青木國夫・武田義雄報告『海外博物館調査報告 科学博物館の海事及船舶部門の展示を中心として』財団法人日本船舶振興会,1966年

#### 【編 著】

- 『科学の道具』日経サイエンス社,1979年
- 『世界の博物館15 レオナルド・ダ・ビンチ博物館:万能と天才のルネサンス文明』講談社,1979年
- 『日本の博物館第8巻 科学のあゆみ:科学博物館』講談社,1981年

#### 【監修・指導】

- 『なぜなに学習図鑑10 なぜなに発明と発見』小学館,1971年
- 『少年少女集英社文庫なぜなに理科学習漫画10 光・音・熱の魔術師』集英社,1974年
- 『学研まんがひみつシリーズ トン・チン・カンの科学教室』学習研究社,1975年
- 『なぜなに理科学習漫画10 光・音・熱の魔術師』集英社,1976年
- 『絵ばなし図鑑7 はつめいふしぎ』主婦と生活社,1980年
- 『やさしい科学図解シリーズ6 力の科学』(ミカル・ケンツァー著)佑学社,1981年
- 『学習漫画 理科(10) 科学のせかい』(井上大助漫画),1989年
- 『おもしろ!なっとく!なぜなぜ大事典7 科学・道具・乗り物101』学習研究社,2001年
- 『おもしろ!なっとく!なぜなぜ大事典9 歴史・地理101』学習研究社,2001年
- 『おもしろ!なっとく!なぜなぜ大事典10 食べ物・ことば101』学習研究社,2001年

#### 【復刻解説・共編】

- 『江戸科学古典叢書4 農具便利論 たはらかさね耕作絵巻』恒和出版,1977年
- 『江戸科学古典叢書15 機織彙編.木棉製作弁』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書8 土木工要録(付録)』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書22 河羨録・通機図解・民用晴雨便覧』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書20 西算速知・洋算用法』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書19 太極地震記・安政見聞録・地震預防説・防火策図解』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書23 大匠雛形・数寄屋工法集』恒和出版,1979年
- 『江戸科学古典叢書21 薬圃図纂・草木奇品家雅見』恒

和出版, 1979年

- 『江戸科学古典叢書 30 究理堂備用方府・究理堂備用製葉帳秘』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 31 紅毛雑話・蘭ニ摘芳』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 26 三法方典』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 27 蘭療方・蘭療薬解』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 24 植学啓原・植物学』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 25 水銀系薬物製法書九篇』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 33 天文図解』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 28 桃洞遺筆』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 29 内服同功・濟生備考』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 32 六物新志稿・一角纂考稿』恒和出版, 1980年  
 『江戸科学古典叢書 39 職人尽絵詞・人倫重宝記』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 36 石巻鑄銭場作業工程絵図・鑄貨図録』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 34 斯魯斯動物学・田中芳男動物学』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 41 千蟲譜』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 37 測量集成』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 35 大匠手鑑・秘伝書図解・大工規矩尺集』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 43 中島流炮術管窺録』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 44 博物学短篇集 上』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 45 博物学短篇集 下』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 40 蒔絵為井童草・蒔絵大全』恒和出版, 1982年  
 『江戸科学古典叢書 38 遠鏡図説・三才窺管・写真鏡図説』恒和出版, 1983年  
 『江戸科学古典叢書 46 軍艦図解・水蒸船説略』恒和出版, 1983年

【論考・報文・共著】

- 「わが国最初のX線技術」『自然科学と博物館』Vol.24 5・6, 1957年8月  
 「スズはく式蓄音機について」『自然科学と博物館』Vol.25 11・12, 1957年12月  
 「科学博物館の機能についての一つの考え」『博物館研究』Vol.32 4, 1959年  
 「投影技術について」『理科の教育』2, 1960年  
 「理科教育の方向」『教育施設』Vol.1 1, 1960年  
 「ゴムと磁石」『自然教育と博物館』Vol.27 9-10, 1960年12月  
 「新しい器具と材料」『理科の教育』1, 1961年  
 「シカゴとワシントンの博物館」『自然教育と博物館』Vol.28 9-10, 1961年11月  
 「新しい理科工作」『理科の教育』4, 1963年  
 「科学技術系博物館の機能」『博物館研究』Vol.37 8, 1964年  
 「日本魔鏡」『自然教育と博物館』Vol.33 5-6, 1966年  
 「ペリリ提督の持参した理科機器」『自然教育と博物館』Vol.35 3-4, 1968年3月  
 「ペリーのもたらした天秤について」『蘭学資料研究会』, 1968年

- 「ペリーのもたらした米国標準天秤」『自然教育と博物館』Vol.36 11-12, 1969年11月  
 「日本の計算機」『自然教育と博物館』Vol.38 3-4, 1971年3月  
 「鈴木梅太郎資料とビタミン研究」『自然教育と博物館』Vol.38 5-6, 1971年5月  
 富田徹男と共著「科学史における作表的分析について」『科学史研究』99, 1971年  
 「伝統技術の社会的価値」『技術と経済』1973年  
 「レオナルド・ダ・ビンチのノートに現れた機械」『自然教育と博物館』第41巻1号, 1974年4月  
 「映像展示の効果と問題点」『博物館研究』Vol.10 7, 1975年  
 「通俗展覧会の文化」『無限大』39, 1978年  
 「レオナルド・ダ・ヴィンチの科学と解剖学」『世界の美術』44, 1979年  
 「博物館友の会について」『博物館研究』Vol.14 10, 1979年  
 「博物館友の解説」『博物館研究』Vol.15 10, 1980年  
 「失敗の技術史」『日本機械学会誌』Vol.83 740, 1980年  
 「科学技術資料センター設立の動向とそれに関連する日本学術会議の要望について」『科学史研究』136, 1980年  
 「日本の水車」『自然科学と博物館』3, 1980年  
 中川徹・榊原 聖文他と共著「<研究報告>我国の水車に関する報告」『国立科学博物館研究報告』Vol.3, 1980年  
 「くらしの中の計量」『自然科学と博物館』Vol.48 1, 1981年  
 「人間と科学」『自然科学と博物館』Vol.48 2, 1981年  
 「農具の技術史( ~ )」『歴史と地理』382・385・388・391号, 1987~1988年  
 「博物館におけるマルチメディアの活用に関する調査結果について」『博物館研究』Vol.31 9, 1996年

これらを通覧して明らかのように、青木は博物館資料や科学館に関する分野と、科学史・科学技術に関する分野について長く関心を持ち続けていたことが窺える。特に後者については、「著作物」目録で明らかのように、少年向けの雑誌に毎号のように、身近な道具のできる実験、科学史上の発見・発明と偉人、読まれるべき好著の紹介の文章を寄せている。これは、少年時代に科学のおもしろさや不思議さを体験的に知ることがいかに大切であるかを自らが実感していたからである。

このことを示すものとして、青木が書いた「科学に志した頃」「私の読書体験」という一文がコレクションにある。これは、公職を退いた後に来し方を振り返ってまとめたものの一つである。

「科学に志した頃」

小学校の1年の、はじめて迎えた冬の雪の朝のことです。教室に入るとストーブがもえ、その上には洗面器が置かれ湯気を立てていました。先生が教室にやって来て、洗面器



の中の湯を示し、この汚れた水は、今朝、校庭に積もった、あの真っ白い雪を溶かしたものだと言明してくれました。

(ママ)

そして、みんなをあつめ、もう一度、雪を洗面器に入れて、溶かしてみせ、真っ白く、きれいな雪も、その中にはほこりのような汚れたものを含んでいることをおしえてくれたのです。

おそらく、先生は、みえないものの中になにかがあることを、幼いわたしたちに教えてくれたのだと思います。このことは、それから数十年たった今でも忘れることはなく、科学を学ぶときの心がけとしているのです。

しかし、理科の道をえらぶきっかけとなったのは、旧制の中学を卒業してからのことです。

ある時、友人が望遠鏡を持って遊びに来ました。その時まで、望遠鏡で天体を観測したことなどは、1度もありませんでした。たしか、その時、友人はオリオン星座の三ツ星の部分を見せられたと思います。思い違いでなければ、そこには、肉眼では見えないけれども星雲がありました。肉眼では見えなかったところに神秘的につつまれた星雲を見たとき、自然のすばらしさに言葉もありませんでした。

自然とは、何とすばらしいものなのだろうか、自然は広大で、また学ばなければならないことがかぎりなくあると思いがこみあげてきたのです。しかし、当時は第2次世界大戦の最中で、勉強もなかなか、思うにまかせませんでした。

それでも、空襲のため灯火管制下の暗いあかりの下で、ファラデーの「ローソクの科学」や「電気磁気実験室」、その他の科学の解説書を読んだことがたのしく思い出されます。(U-207)

#### 「私の読書体験」

私はごく平凡に学生時代をすごしました。ふつうの子どもが読むような童話や偉人物語を読み、当時誰もが読んだ「幼年クラブ」や「少年クラブ」や「子供の科学」などで育ちました。

そして、なりゆきそのまま物理学を学ぶことになりました。生来物ぐさな私は、将来は研究所などで何かを研究できればと考えていたのですが、皮肉なことに理科教育に関係することになり、理科の先生方に実験法を指導したり、テレビで実験をして見せたりするような仕事をすることになってしまったのです。

そのような時に手にしたのが平田森三著『物理実験をはじめ人のために』(目黒書店・絶版)という本でした。

初心者向けに実験の心がまえや実験の意味、実験器具の使い方などが描かれていましたが、なかに糸ゴムの話がありました。

一つのゴムを引っばると伸びます。引っばる力をなくすと元のように縮みますが、完全に元の状態にはなりません。そんなことをくりかえすと、伸び方も、縮み方もかわってしまいます。

このゴムの例は、実験をはじめるとき、その材料がこれまでどのような経過を経てきたか、作られてからそれまでに、どのような経過をたどってきたかによって、実験の結果がちがうということを教えてくれるのです。ゴムが伸びやすいからこのような影響をうけやすいということではありません。

鉄鋼でも、木材でも、自分の手もとにくるまでにはいろいろな道をへてくるものです。一つに実験結果が得られたからといって、それを簡単に解釈してはいけないという物理実験のきびしさを教えてくれたのです。そして、そのことが、私の実験に対する考えにどのくらい大きな影響を与えてくれたかわかりません。(U-861)

青木は少年時代の思い出を大切にしていたことが感じ取る文章である。少年向けの雑誌に投稿し続けていた力の源はこの輝く記憶であったのであろう。

青木が晩年に記した履歴書(V-29)では、研究テーマの項に「日本における技術移入について」と記してある。昭和50年代以降に取り組んだ『江戸科学古典叢書』の翻刻や、産業考古学学会での活動は、これを意識してのものであったのである。



図3 平成6年12月18日に行った青木のクリスマスレクチャー。1861年にファラデーが行ったクリスマスレクチャーの再現をした。

#### 4 コレクション受贈にいたる経緯

千葉県立現代産業科学館は平成6年6月に開館した。サイエンスショーなどの実験や体験型展示資料を中心とした科学館の性格に加え、千葉県の現代産業の歴史や先端的な技術開発の紹介も扱う理工系博物館としての性格も併せ持つ館として出発した。

そうした当館の開館準備や初期の事業開発に多大な貢献をされたのが初代館長青木國夫である。青木と当館の関りは、昭和57年度からの建設準備委員会委員になった頃より始まる。爾来、十数年余に亘って当館の発展・充実に尽力されたのである。

青木は、平成9年3月に館長を退いた後は、東京国際大学教養学部教授となり後進の指導に当たってきたが、平成13年11月7日に逝去された。

その後、御遺族から、青木が収集した図書をはじめとした歴大な文献資料の寄贈の申し入れがあった。平成14年1月11日に当館職員が予備調査

を実施し、同年同月 20 日付けで段ボール 92 箱分の資料を正式に受け入れた。

当館は、どちらかといえば科学館としては後発の館となるであろう。そのため、科学全般に係る古典とも呼べる重要な書籍の所蔵は薄いものであった。青木が収集し遺してきたこれらの文献資料は、当館の科学図書を飛躍的に充実させるものであった。

## 5 コレクションの整理

館へ運び込まれた 92 箱は、ある程度は青木自身が生前に整理し、また御遺族のお力で分けがなされていたようである。しかし、受け入れの段階で一般書籍が多数を占めていることが知れたので、まずおおまかに一般図書資料の 68 箱とそれ以外の 23 箱と分けられた。当館には入館者も利用できる図書コーナーがあり、そこで活用できるものを一般図書として選択した。選択された図書は書誌情報が記録され、ラベリングの後に、平成 15 年度に一部を図書コーナーの棚へ配架し活用している。

平成 16 年度に、図書として扱いにくい資料として残されていた 23 箱分の整理に着手した。整理方針は、原状記録方式に準じて実施した。箱に通し番号 (A ~ W) を打ち開封し、上から順に、綴・封筒詰め・紐括りなどの状態を保存しながら、体裁、資料名、編著者名、発行年月日、発行所、備考 (状態、青木のメモ、頁間に挟まれる資料等) について記録をとり、1 箱ごとに資料の通し番号を付した。また、今後の活用を探る意味で、「ノート」「綴」「著作」「写真等」「スクラップ」「収集文献」「リーフレット」「通信」「辞令」「文書」等の分けをした。

## 6 コレクションの概要

### (1) ノート・綴・フォルダー 118 点

タイトルの状態で一括してある資料である。ノートは大学ノートである。日記・仕事の備忘・原稿の立論・実験試案・読書メモなどが書かれる。表紙にはタイトルや通し番号が付されており、青

木による編年の跡が見られる。公的な紙面に現れなかった青木の肉声ともいべき言葉が散見される。



図 4 ノート (F92 ~ 94)

綴は、事務用ファイルやクリアファイル、封筒詰めの状態である。そこへ青木が書いたタイトルがあって、中身がタイトルに共通する資料でまとまっていれば、今整理ではそれを一括として扱った。例えば魔鏡のタイトルがあれば、魔鏡に関する関係論考のメモや写真・スクラップとともに、立論メモや実験データがまとまっている。ファイルに綴られてはいるが、中身に共通項が少ないものや、冊外 (さつはずれ) ばかりで誌名がはっきりしていないものなどは、個々に拾い上げて (2) 著作物へ組み込んである。

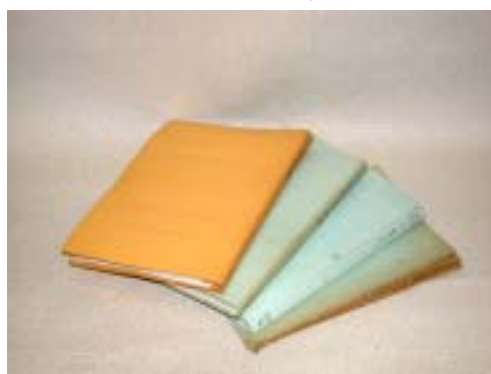


図 5 日本魔鏡の綴り

フォルダーには、自身の履歴や辞令、ワープロ感熱紙の原稿などがある。ワープロ感熱紙の原稿は、幼い時の思い出等が書かれており、自分史作成のメモではないかと思われる。おそらく著作物を編みそこへ載せようとしたのではなかったか。年代のタイトルを打ちながらも中身が空虚であるもの

もあり、この作業の途上で病を得てしまったのであろう。

## (2) 著作物 1,012 点

青木が著した書籍・報文・論考・雑誌記事・新聞記事などの他に、指導や監修として携わったもの、対談・インタビューで青木の発言があるものをここにまとめた。体裁には、原稿（生原稿、校正原稿）、抜刷、冊外、コピー、レジュメ、台本がある。冊外とは、雑誌や単行本のうち、当該頁のみを本体から切り離されてある状態をいう。かがり糸を外した状態ではなく、切り取りであるため、印刷時の情報が欠けていて書誌情報を得られないものが多い。硬質な調査報告もあれば、少年向け雑誌のやさしい実験紹介など多岐に亘っている。特に後者については、1960年代から90年代にかけて複数の雑誌に毎月のように掲載されている。驚異的な筆力と感嘆するほかはない。



図6 U-518～58を綴る冊外

## (3) 新聞・スクラップ 238 点

青木が書いた新聞記事、「おもしろサイエンス」「不思議サイエンス」「はてな?ワールド」「子供の科学」などの通しタイトルをもった連載記事が多い。時事通信社関係の記事が多く、そこから全国の地方紙に掲載されたが、残念ながら紙名・年代が不明のものが多い。その当時話題になった科学技術の内容をやさしく解くものが多い。



図7 時事通信社から依頼の記事スクラップ(U-1022)

## (4) 写真 8,184 点

大きく39テーマに分けて分類した。青木が科学博物館で関わった資料の写真や、執筆に携わった書籍に用いた洋書挿図の写真、海外視察時に撮影した科学館・博物館の写真などがある。

なお、目録で箱に「無番」とあるものについては、平成14年に受け入れた一群とは別に生前に青木から寄附されていた写真である。

## (5) 通信・文書・辞令等 29 点

青木への私信、原稿依頼状などの通信、メモの類で他の項目に該当しない一般文書、辞令などをここにまとめた。

## (6) 収集文献 594 点

編著者が青木ではない文献をまとめた。体裁は一般書籍の他、抜刷、月報、コピー、レジュメである。このうち170点程洋書を含む。欧米各国の技術史に関するものやミュージアム・カタログが中心である。T箱にある全国の常設展示解説書は、財団法人日本生命財団の博物館総合案内出版助成の審査員として受領したものである。

## (7) リーフレット 64 点

博物館・科学館のリーフレット類をまとめた。このうち半数以上は外国の科学館や観光地に関するものである。

## (8) 雑誌 665 点

国内の研究連絡誌である。『科学史通信』『科学史研究』『物理学史通信』『計量史研究』『蘭学資料研究会報告』『産業考古学』『日本産業技術史学会報さんぱく』等の誌名からわかるように、技術史



に関する雑誌が大半を占める。

### (9)切手 384点

目録とはしていないが、ストックブック1冊である。科学者・発明家の肖像や作品が掲載されている世界各国の切手を収める。



図8 切手アルバム

## 6 おわりに

以上のように、青木コレクションの総点数は10,904点、うち著作物1,012点、写真8,184点、他は収集文献等1,323点を数える。これらの資料のうち、残念ながら、資料の中で発表年や掲載誌が不明のものが多々あり、これらについては今後とも調査を続け情報を加え精緻な目録にしていかなければならない。

コレクションの中で最も重要なものが「著作物」であることは間違いがない。青木の業績を物語るものであると同時に、戦後の科学館・科学技術史研究の動向を学び取ることができるからである。少年向け雑誌に掲載された科学実験については、今日でも十分再現が可能なものである。科学の原理は今も昔と変わることはなく、身の回りにある物を使ってやさしく解くこと、発明・発見の感動を伝えていくことの大切さも不変であると思われらされる。

コレクションの整理は、科学館の発展を願ってやまなかった青木の人と仕事を振り返る作業でもあった。作業は、重厚な科学史の知見に触れる楽しいものであったが、その広大さと書誌情報不足の資料の存在に戸惑うこともしばしばであった。けれども、この作業は青木國夫の全仕事を見通す

貴重な経験であった。生前を知らない筆者にとって青木は、今では長年教えを請うてきた師のような存在に思える。

この報告の中に間違いや、青木の意味への誤解があれば、それは全て筆者の責任である。御寛恕いただきたいとともに、御指摘や御批判を賜れば幸いである。

なお、本稿を成すにあたっては、『子供の科学』編集長松島考人様、国立科学博物館理工学研究部長佐々木勝浩様から御教示を得た。記して篤く御礼申し上げたい。

最後に、コレクションを御寄贈いただいた御遺族の皆様へ感謝を表し、あわせて故人の御冥福をお祈り申し上げ稿を閉じたい。

(平成18年3月6日 成稿)